

大学生の敬語意識をめぐって

齋藤達哉

はじめに

日本語学に関係する講義を担当している
と、「敬語を教えてほしい」という要望が多
数寄せられる。一体、履修生たちは敬語の
何を知りたがっているのだろうか。

そのことを知るために、文化庁「平成一
六年度 国語に関する世論調査」の問いを
利用して、履修生の意識調査を行った。本
稿ではその結果の報告を行う。また、履修
生が敬語に関して困っているその内容は、
雑誌記事の論調や、近年の国語施策の方向
性とも通じる点がある。また、近い将来、
文化審議会国語分科会によって解決の糸口
が示される可能性が高いことも指摘する。

1. 「国語に関する世論調査」への 回答

「国語に関する世論調査」は、国民の言葉
に対する意識を知るために、文化庁が毎年
一回実施しているものである。最新の平成
一六年度調査では、全二二問のうち、敬語
に関する問いが一一問見られた。⁽¹⁾

跡見学園女子大学の履修生の敬語意識を
知るためには、この一六年度調査を利用し
た。調査の対象は、春学期・総合科目「日
本語を見つめ直す」の履修生(三・四年生)
で、有効な回答者数は九九人であった。以
下では、一六年度調査の「総数」「女性・16
〜19歳」「女性・20〜29歳」の結果と比べて、
顕著な違いが見られる点について報告する。

1. 1. 敬語に対する規範意識

「問2. 敬語に関して困っていること」

だれかを尊敬したり、自分が謙そんした
り、ものごとを丁寧に言ったりするとき
に使う言葉を敬語と言います。あなたは、こ
の敬語や敬語の使い方に関して、困ってい
ることや気になっていることがありますか。
ここに挙げた中があれば幾つでも選んでく
ださい。

- (ア) 知らない敬語がたくさんある
- (イ) 正しい敬語の使い方が分からない
- (ウ) 周りの人が使っている敬語の使い
方が気になる
- (エ) 正しい敬語を使っているか自信が
ない
- (オ) テレビ等の出演者の敬語の使い方

が気になる

(カ) 心のこもっていない敬語がよく使われる

(キ) 敬語を使うとうまく自分の気持ちを表現できない

(ク) その他

(ケ) 特に困っていることや気になっていないことはない

選択肢 (ア) (ウ) (オ) (カ) について

の履修生の集計結果は、一六年度調査の「総数」「女性・16～19歳」「女性・20～29歳」のいずれかの結果に近い。

○「総数」の結果に近い：(ウ)

○「女性・16～19歳」の結果に近い：

(ア) (オ)

○「女性・20～29歳」の結果に近い：

(カ)

一方、選択肢 (イ) (エ) (キ) (ケ) では、履修生は、一六年度調査とは異なる集計結果を示した。

○「女性・20～29歳」よりも高い

(イ) 正しい敬語の使い方が分からない

い

(エ) 正しい敬語を使っているか自信がない

(キ) 敬語を使うとうまく自分の気持ちを表現できない

○「総数」「女性・16～19歳」「女性・20～29歳」よりも低い

(ケ) 特に困っていることや気になっていないことはない

選択肢 (イ) (エ) (キ) は、一六年度調査の中では「女性・20～29歳」が最も高い割合を示している。履修生はそれよりも更に高い割合を示している(図1参照)。これは、教師が実施した調査に対して、規範意識が強く働いた結果とも考えられる。

規範意識が強く働く環境下であったにせよ、履修生たちには他人の使う敬語を気にする傾向よりも、(自分自身の使う敬語について困ったり気にしたりする傾向が強くて出ている)ことがわかる。

「問3. 敬語の使い方間違い」

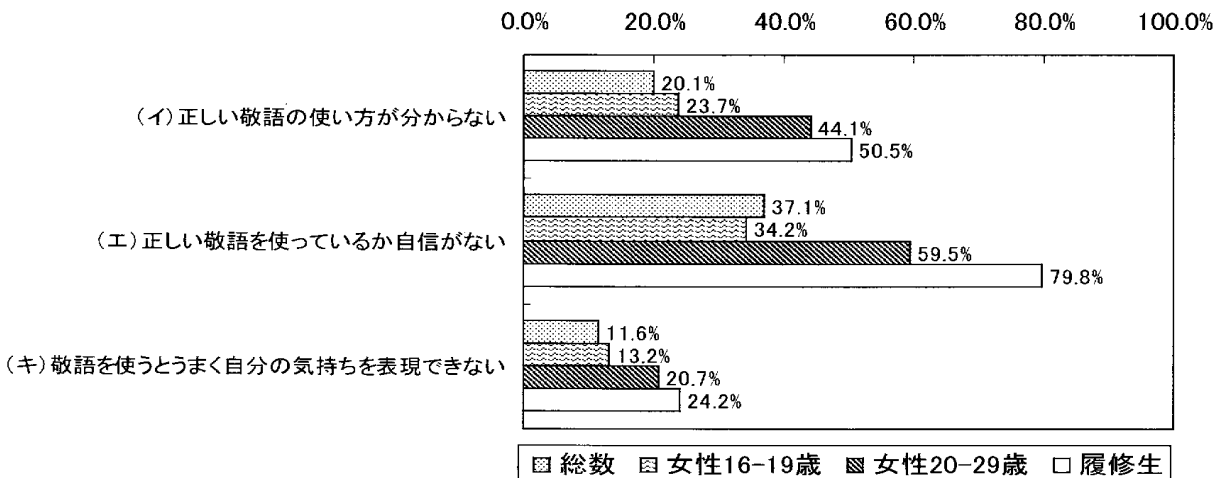


図1 問2. 敬語に関して困っていること

最近、敬語の使い方に間違いが多くなってきているという指摘がありますが、あなたはそう思いますか。

- (ア) そう思う
- (イ) 少しそう思う
- (ウ) 余りそう思わない
- (エ) そう思わない

「敬語の使い方に間違いが多くなってきている」と感じることに、履修生の「そう思う」「少しそう思う」を合計した「思う」は95%になる。一六年度調査の中で最も高い割合を示した「女性・20～29歳」(86・4%)よりも、(より規範的方向へ傾いている)ことがわかる(図2参照)。

〔問4. これからの敬語の在り方〕

あなたは、これからの時代の敬語はどうあるべきだと思いますか。あなたの考え(a)と(b)のどちらに近いかをお答えください。

- (a) 新しい時代にふさわしく、敬語は簡単で分かりやすいものであるべき

だ

- (b) 敬語は伝統的な美しい日本語として、豊かな表現が大切にされるべきだ

- (ア) (a) の考え方に近い
- (イ) (b) の考え方に近い
- (ウ) どちらとも言えない

(ア)は、「新しい時代にふさわしく、敬語は簡単で分かりやすいものであるべきだ」を支持するものである。一六年度調査では、「総数」「女性・16～19歳」「女性・20～29歳」のうちでは、「女性・16～19歳」が最も低かった(28・9%)。履修生では、それを大きく下回る結果(16・2%)を示している(図3参照)。履修生の間では、「簡単で分かりやすい」敬語を望む割合は低いことがわかる。

1. 2. 敬語の判別意識

〔問5. 敬語か否か〕

あなたは、ここに挙げる(1)から(10)の下線部が敬語だと思いますか、それとも

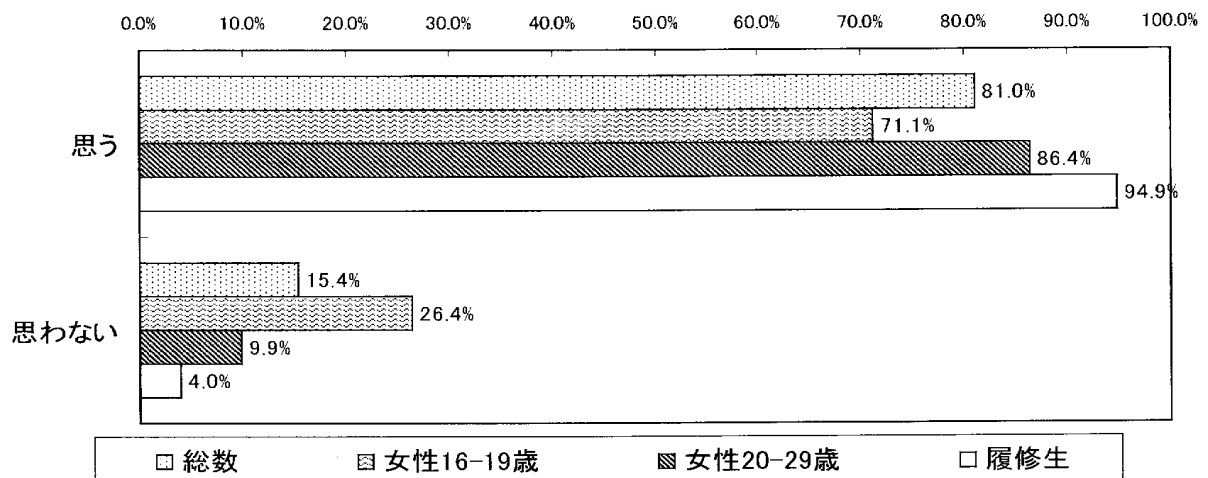


図2 問3. 敬語の使い方の間違いが多いと思うか

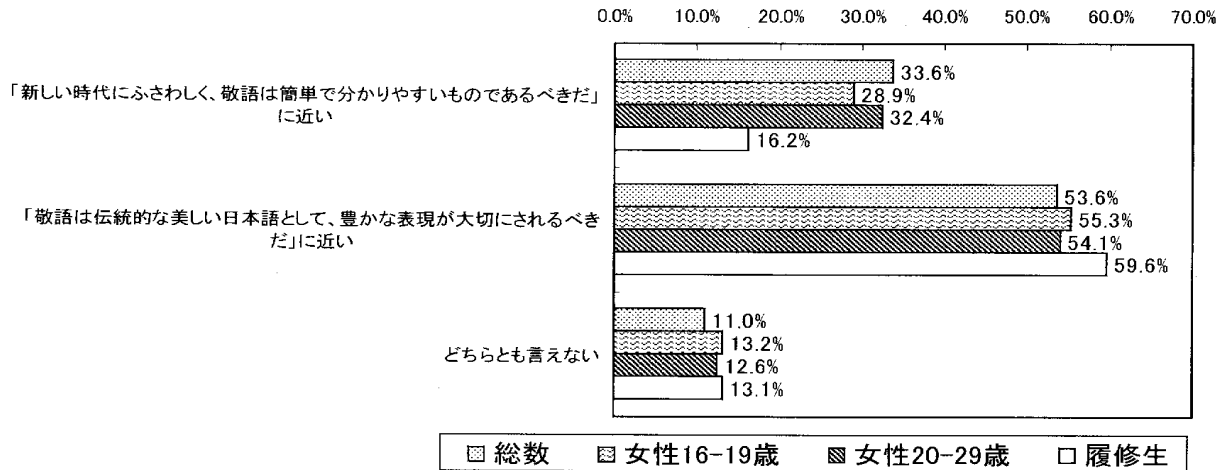


図3 問4. これからの敬語の在り方

敬語だとは思いませんか。

- (1) 私は野菜を食べます
- (2) あしたは晴れてほしい
- (3) お茶を飲みましょう
- (4) よろしくお願い申し上げます
- (5) あの方は何でも御存じだ
- (6) あの方には感謝している
- (7) そこに座りなさい
- (8) そこに座ってもらえる？
- (9) すまないが、その鉛筆を取って
くれないか
- (10) 社会のために微力を尽くしたい

(1) (3) については、一六年度調査の「総数」「女性・16〜19歳」「女性・20〜29歳」では、それぞれ6〜7割程度が「敬語だと思わない」と答えている。それに対して、履修生では、「敬語だと思う」と「敬語だと思わない」とがほぼ均衡している(図4参照)。

一般的な考え方は、(1)「ます」は丁寧語と呼ばれる敬語、(3)「お」は美化語とも呼ばれる敬語である。履修生が、丁寧

語・美化語も敬語であると認識している度合いは、一六年度調査の結果よりも高い。それ以外の敬語(4)謙譲語「申し上げ(る)」、(5)尊敬語「御存じ」の認識度と、敬語以外の表現の認識度については、一六年度調査と同様の割合を示した。この結果は、履修生の〈尊敬語・謙譲語・丁寧語〉といった敬語の三分法で判別する傾向の強さ)を表している。

問12. 敬語の正誤

あなたは、ここに挙げた(1)から(8)の下線部分では敬語が正しく使われていると思いますか。それとも、正しく使われていないと思いますか。

- (1) この商品の使い心地を是非ともお試しください
- (2) あの方は、昨年東京にまいりました。大学で教えていらつしやいます
- (3) 先ほど中村さんがお話しされたように、この本はとても役に立ちます
- (4) (高校生が担任の先生に) あす父

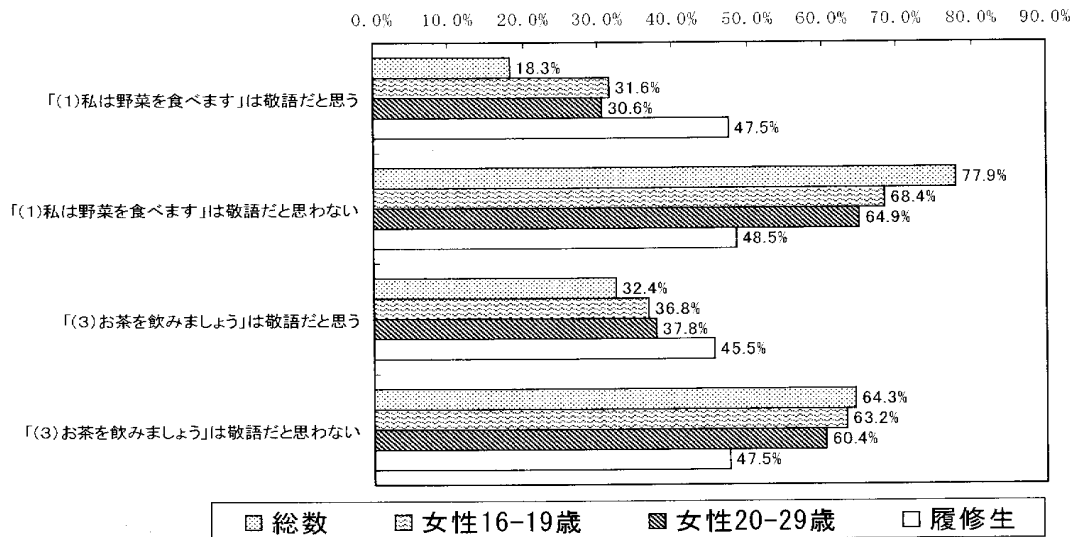


図4 問5. 敬語か否か

がまいります、お目に掛かっているだけでいいか

(5) ただいま会長が申されたことに賛成いたします

(6) 間もなく先生がお見えになります

(7) この電車には御乗車できません

(8) 総務課の武田さんは、どちらにおられますか

(3) (4) は、伝統的な使われ方とは異なる例である。また、(5) (8) は、一概に誤用だとは言えないとされる例である。

いずれも、一六年度調査の「総数」「女性・16～19歳」「女性・20～29歳」と比較して、「正しく使われていると思う」の割合が低く、「正しく使われていないと思う」の割合が高い(図5参照)。履修生は、一六年度調査の結果よりも、伝統な使われ方が正しい敬語であると認識している割合が高いことがわかる。

1. 3. 敬語の運用に関する意識

問6. 人間関係と敬語(敬語を使って話す

べき相手か否か)

ここで挙げた(1)から(10)で、(a)にとつて(b)は敬語を使って話すべきだと思えますか。それとも、そう思いませんか。

a ↓ b

(1) 子 ↓ 親

(2) 年下のきょうだい ↓ 年上のきょうだい

(3) 学生・生徒 ↓ 教師

(4) 学校のクラブの後輩 ↓ 同じクラブの先輩

(5) 年下の人 ↓ 年上の人

(6) (10) は、(a)と(b)の年齢は同じぐらいとします

(6) 店の人 ↓ 店の客

(7) 店の客 ↓ 店の人

(8) 患者 ↓ 医師

(9) 医師 ↓ 患者

(10) ものを頼む立場の人 ↓ ものを頼まれる立場の人

(1) 「子 ↓ 親」では、「総数」「女性・16

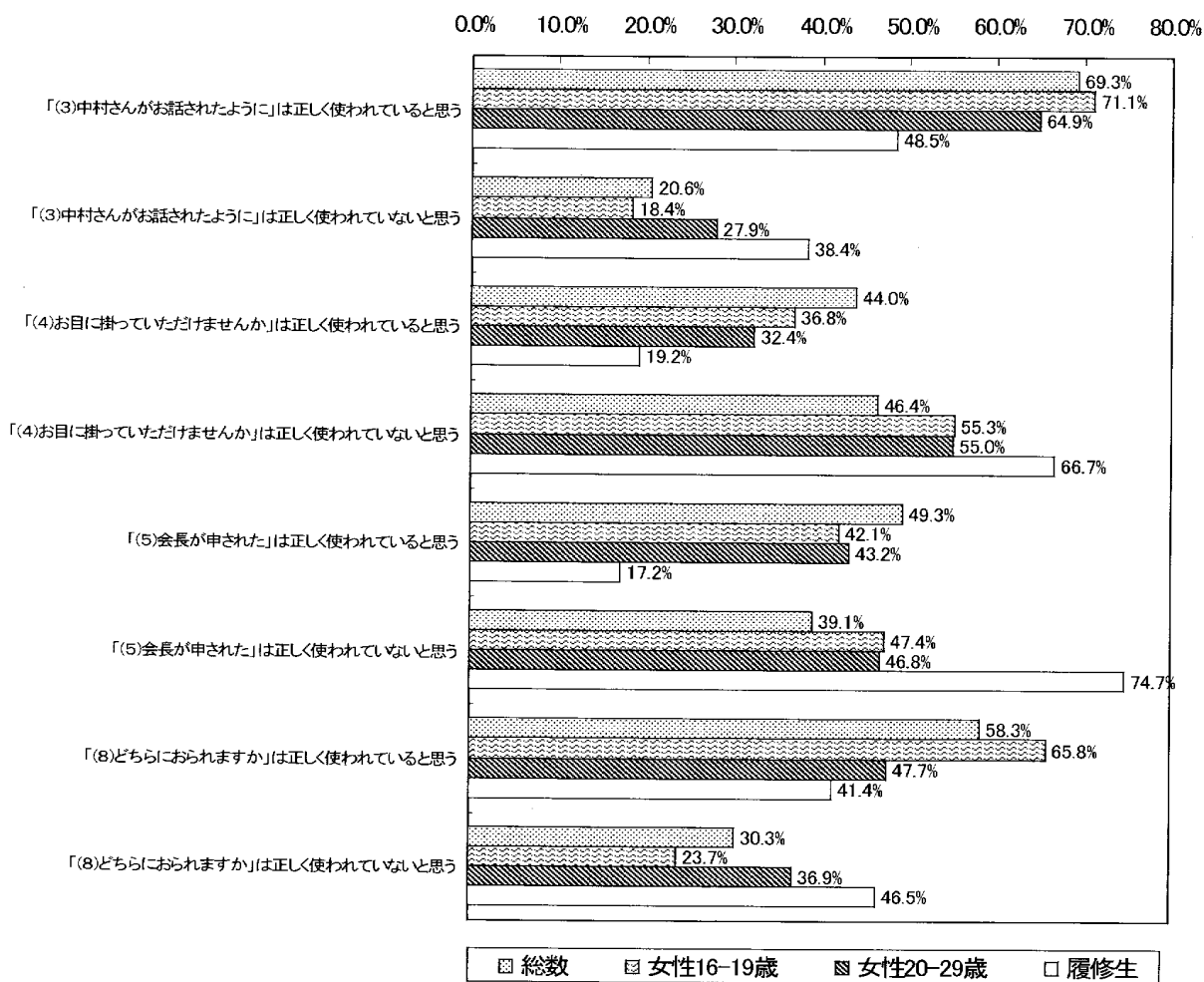


図5 問12. 敬語の正誤

「19歳」「女性・20～29歳」と比較して、「敬語を使って話すべき相手だと思わない」がより低く、「場合によると思う」がより高いという傾向が見られる(図6参照)。親子関係においては、〈親密度と場面とを量りながら敬語の使用を調整すべきだ〉という意識が、一六年度調査よりも強く表れている。

(6)「店の人↓店の客」、(7)「店の客↓店の人」、(9)「医師↓患者」では、「総数」「女性・16～19歳」「女性・20～29歳」と比較して、「敬語を使って話すべき相手だと思おう」が高い傾向が出ている(図6参照)。ことに、(7)「店の客」、(9)「医師」が敬語を使用することを望む傾向が、一六年度調査よりも強く表れている。履修生には、〈その場で強い立場に立っている者も、立場にかかわらず相手に敬語を使うようにしてほしい〉と考える傾向が見られる。

以上、一六年度調査との比較では、履修生が敬語に関して次のような意識を持っている。

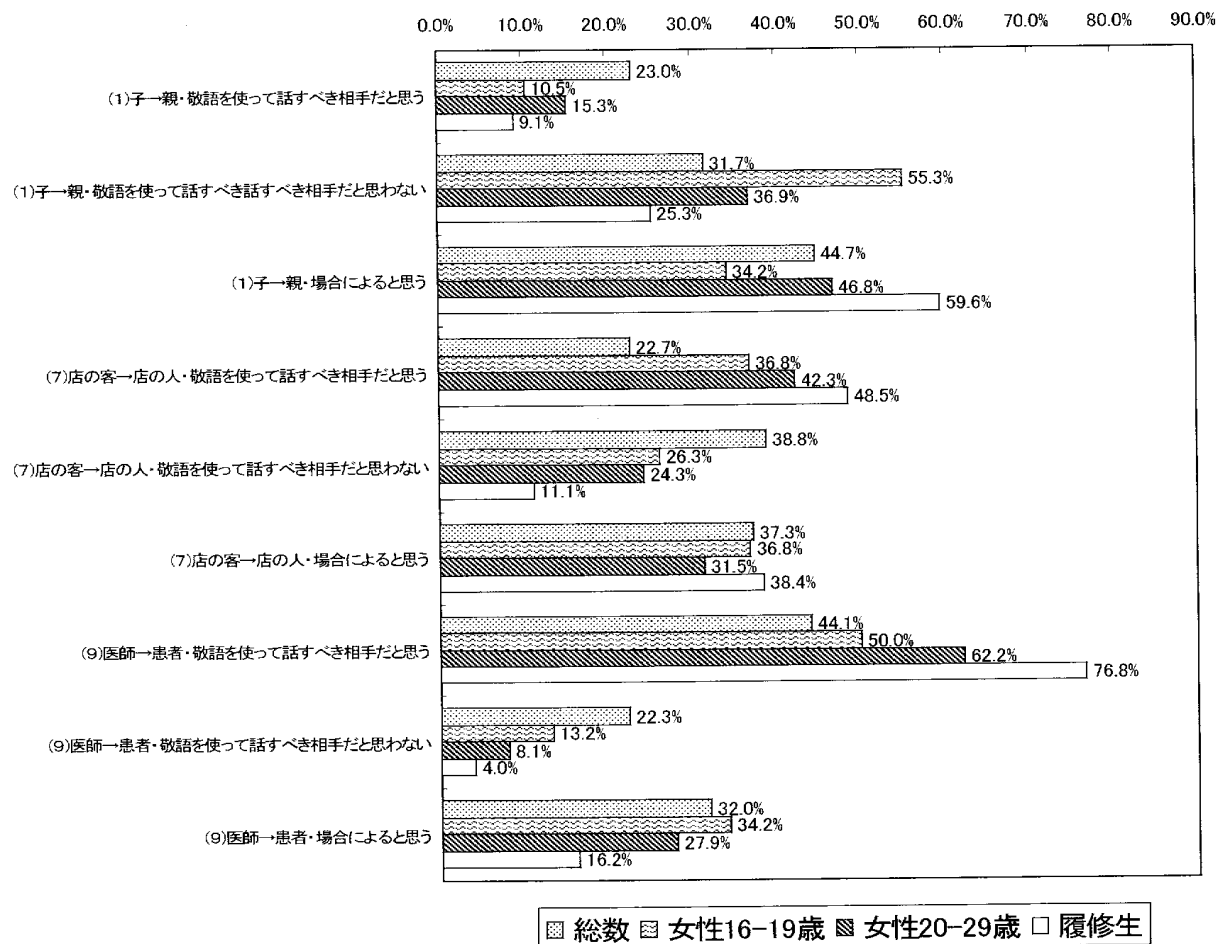


図6 問6. 人間関係と敬語（敬語を使って話すべき相手か否か）

いることがわかった。

- ① 自己の敬語使用に対する強い規範意識
- ② 伝統的な敬語の使用が正しい敬語であるとする判別意識

- ③ 親子関係における柔軟な敬語の運用意識と、立場にかかわらずに相手に配慮する敬語の運用意識

2. 敬語について困っている人

2. 1. 実態に関する問い

次に、上記の履修生の敬語意識形成の背景にある言語生活の実態を探ることを試みたい。一六年度調査「問2. 敬語に関して困っていること」の質問方法を変更し、自由記述も付け加えたものを用意し、再調査を実施した。

問A. 敬語について困った経験はありますか？

- (ア) よくある
- (イ) ときどきある
- (ウ) ほとんどない
- (エ) ない

問B. 「(ア) よくある」「(イ) ときどき

ある」と答えた人は、どのようなことで困ったかを具体的に記述してください。

この調査は、1. 1〜1. 3に示した調査とは別の日に実施したため、回答者数が異なり、一一一人となった。

問Aでは、「よくある」「ときどきある」を合わせて9割近くが「困ったことがあると感じている」という結果が出た。

- (ア) よくある 24人 (21・6%)
- (イ) ときどきある 74人 (66・7%)
- (ウ) ほとんどない 12人 (10・8%)
- (エ) ない 1人 (0・9%)

問Bは自由記述で、九八人からの回答を得た。回答の記述内容は、以下の二つの観点から集計した。

i. 敬語に困った時の「生活の場面」について

ii. 敬語に困った時の「相手」について

2. 2. 敬語に困った時の

「生活の場面」について

自由記述の中での「生活の場面」を示す記述について、集計結果を多い順に示すと以下のようになる。なお、一人の回答記述の中に場面が複数記されている場合や、場面の記述がない場合も見られた。

- 1. アルバイト 53件 (54・0%)
- 2. 学校 12件 (12・2%)
- 3. 就職活動 6件 (6・1%)
- 4. 実習活動 4件 (4・1%)
- 5. サークル活動 2件 (2・0%)
- 近所付き合い 2件 (2・0%)
- 親せき付き合い 2件 (2・0%)
- 自宅 2件 (2・0%)
- 6. 入試 1件 (1・0%)
- 病院 1件 (1・0%)

敬語について困ることの最も多かった生活の場面は「アルバイト」が最多で、「学校」を大きく上回っている。

なお、一六年度調査の問6に、(7)「店の客が店の人に敬語を使うべきだ」と答え

た履修生が48・5%に上った背景も、ここに求めることができそうである。履修生は、生育過程で、店の客としての立場を数多く経験しているはずである。そして、「アルバイト」の場面では、「店の人」の立場に立つて「店の客」と接することを経験する。「店の客」「店の人」の両者の立場を経験することで、立場にかかわらず相手に敬語を使うべきだという配慮の意識が培われたことが窺える。

2. 3. 敬語に困った時の「相手」について

敬語について困ったことが記述されている中で、「相手」を示す記述について集計すると、以下のようなになる(丸括弧内の数字は件数)。なお、一人の回答記述の中に相手が複数記されている場合も見られた。

- 1. 店の客 (43)
- 2. 目上の人 (18)
- 3. 学校の先生 (12)
- 4. 採用側の人 (8)

5. 年上の人 (6)
6. アルバイト先の上司 (5)
7. 実習活動先の人 (4)、先輩 (4)
8. 親せきの人 (2)
9. 親 (1)、近所の人 (1)、医師 (1)、親しくなった年上の人 (1)、年上の同僚 (1)、年上の後輩 (1)、同年の先輩 (1)、年下の先輩 (1)、余り親しくない相手 (1)、初対面の相手 (1)、相手の立場がはっきりしないとき (1)

「店の客」「学校の先生」が上位にあるのは、2. 2の生活の場面で「アルバイト」

「学校」が上位であったことと連動する。

数は少ないが、注目しておきたい回答として、以下のようなものがある。「親しくなった年上の人」「年上の同僚」「年上の先輩」「同年の先輩」「年下の先輩」は、年齢と上下関係とが複合している事例である。敬語選択の判断材料が二つあり、なおかつ相反している。そのため、相手との心理的距離を測りかねていることが窺える。

また、「余り親しくない相手」「初対面の相手」「相手の立場がはっきりしないとき」といった事例は、敬語選択の判断材料が不足しているために、相手との心理的距離を測りかねていることが窺える。

3. 困り方の実態の分析

以下では、問Bで得られた回答について、「経験不足に起因するもの」と「人間関係に起因するもの」との二つの観点から更に分析する。

3. 1. 経験不足に起因するもの

「敬語と謙譲語を取り違えた」「こなれた敬語表現を使えない」など、実際の運用方法が身につけていないと感じて困っている場合は、経験を積むことで解決できる可能性が高い。以下に引用する回答からは、敬語の必要性を知っているものの、必要な場面に立たされた時に、円滑な運用ができないことへの困惑が読み取れる。

○バイト先や先生と話すとき、敬語と謙

譲語がゴチャ混ぜになる。

○接客をしていて、誰に対して敬語を使っているのかが分からなくなってしまう。お客様に敬語を使っているはずなのに、自店に使っていることになっていたとか。

○いつも友達同士で話している時は、敬語を意識していないため、目上の人と急に話したりすると、どうしても不自然な話し方になってしまい、自分のキヤラまで出せなくなってしまう気がする。

○使い慣れていない敬語で話すと、ぎこちなくなってしまう。

こうした事例では、敬語を使う場面に多く接し、慣れることで、困惑は解消していくはずである。ただし、アルバイトの場面では、マニュアル敬語を丸暗記するだけになる場合もあり、気持ちの込められない形だけの敬語を身に付けてしまう弊害が生じることもある。

また、生活の場面としての「学校」、相手

としての「先生」が比較的少なかったことは、敬語指導に対しての軌道修正を示唆しているとも言える。尊敬語・謙讓語・丁寧語などの敬語の仕組みを説くことも一つの方法ではある。しかし、それ以上に大切なことは、「敬語は、相手への配慮を表す言葉の一つである」ということを実践的に指導することである。ただ、実際にそのような指導をしようとしても、現状では「扱場所」になるものはない。したがって、教師によって異なる敬語観を示すことも予想され、その場合、学生は混乱してしまう。指導する側にも「扱場所」が必要となってくる。

3. 2. 人間関係に起因するもの

複雑な人間関係に起因するものは、経験を積むことだけでは解決できない面がある。以下に紹介するのは、敬語の運用はある程度できる人が、人間関係の中で敬語の調節に迷っている事例である。

第一の事例としては、2. 3に示したように、敬語選択の判断材料が二つあり、な

おかつ相反しているものである。以下に引用する回答からは、年齢の上下関係と、立場の上下関係とが複合した時に、自分との距離の置き方にとり方に迷いが生じていることが読み取れる。

○適度に仲良くなった先輩等目上の人、あまり固すぎても距離をおいているようになっちゃってしまったり、フランクになりすぎて失礼なので…。

○アルバイト先でパートのおばさんと話すとき。

○アルバイト先で年上の後輩と話するとき。

○サークルに所属しているが、一学年上の同い年の人と歳が一緒なので、公の時と私的な時で使い分けに困る。

○アルバイト内で、年下の子が先に働いていた場合、敬語で話すべきか迷ったことがある。

○メールのやりとりで、相手があまり親しくない、初めてメールをするなどの場合。

こうした場合、「年齢・立場が上の人は

敬う」という伝統的な敬語の説明方法だけでは解決できず、細やかな心理的要素を働かせることが要求される。

第二の事例は、いわゆる身内敬語の問題である。具体的な回答としては、以下のようなものである。

○お客様と上司と会話するとき、お客様と自分のお店の店長とに対する敬語のレベルが同じでいいのかわからなくなったりすることがある。

基本的には、「外部の人に対して、身内のこと言うときに敬った言い方をしない」のが伝統的な敬語の説明方法である。しかし、現代社会では、身内なのか身内以外なのかの線引きの迷いを生じることがある。

このように、履修生が敬語について困ったと感じたことの中には、人間関係の多様化や社会の変化によって、敬語の運用に生じた迷いが見られる。このことは、「敬う」という伝統的な説明方法だけでは解決できない性質のものである。

4. 雑誌記事の論調・ 国語施策の動向

3. 2で指摘したような、人間関係の多様化や社会の変化によって生じた敬語運用の変化は、一般社会でも懸念されており、国語施策も解決策を探る方向に動いている。以下ではそのことを紹介する。

4. 1. 雑誌では敬語を どう扱っているか

国立国語研究所では、月刊の雑誌に掲載されている日本語関連の記事の目録をデータベース化している。⁽²⁾ データベースを一瞥してみると、敬語を主題にした記事は、おおよそ次のような論調となっている。

(1) 敬語の使い方の変化について、事実を指摘するもの

○敬語の使い方の誤りに対して苦言を呈する。

○敬語は伝統的な美しい日本語であるが、最近では損なわれている。

○敬語は「日常会話」から消えた。今は「特別」な場面でしか使われていない。

(2) 敬語の変化について、その背景を探るもの

○伝統的な美しい日本語である敬語が損なわれたのは、社会の変化(都市化や少子化など)による。

○対者との関係で、どういう時に敬語を使うかといったことは、幼いころから身に付けるべき事柄であるのに、現在はそれができていない。

こうした記事は、大部分がコミュニケーションの分野に分類されている。竹部(二〇〇五)は、二〇〇二～二〇〇四年の総合雑誌の記事ではコミュニケーションの分野に関連したものが常に上位にあることも報告している。⁽³⁾

敬語の話題だけに限ったことではないが、竹部(二〇〇三・二〇〇四)によると、総合雑誌では、日本語の「変化」を、美しい

伝統を壊す「乱れ」として懸念する傾向が見られるという。⁽⁴⁾ そして、雑誌では、上記(2)のように、原因を社会環境の変化(都市化や少子化による人間関係の変化、家庭・生育環境の変化など)に求める傾向が見られる。

変化を乱れとしてとらえることの適否は別として、社会環境の変化が敬語運用の変化にかかわっていることが無視できない問題である。

4. 2. 国語施策では 敬語をどう扱っているか

戦後の国語施策は、表記の領域(仮名遣い・漢字など)を中心に扱ってきた。言葉の運用の領域に属する敬語については、第一期国語審議会が昭和二七年四月に「これからの敬語」を建議した後は、大きく取り扱われることはなかった。

敬語が、再び取り上げられるようになったのは、平成に入ってからのことである。その流れを示すと以下のようになる。

①平成五年六月、第一九期国語審議会が

「現代の国語をめぐる諸問題について」(報告)の中で「敬語」に触れた。

②平成一〇年六月、第二二期国語審議会が「新しい時代に応じた国語施策について」(審議経過報告)の中で、「敬意表現」を提唱した。

③平成一二年一二月、第二二期国語審議会が「現代社会における敬意表現」を答申し、「敬意表現」についての基本的姿勢を示した。

④平成一七年二月、文化審議会国語分科会が「国語分科会で今後取り組むべき課題について」(報告)の中で、課題の一つとして「敬語に関する具体的な指針作成について」を示した。

⑤平成一七年三月、右④を受け、文部科学大臣による文化審議会への諮問に、「敬語に関する具体的な指針作成について」が盛り込まれた。

この流れの中で「敬意表現」は、③の中に次のように説明されている。

コミュニケーションにおいて、相互尊重の精神に基づき、相手や場面に配慮して使い分けている言葉遣いを意味する。それらは話し手が相手の人格や立場を尊重し、敬語や敬語以外の様々な表現から適切なものを自己表現として選択するものである。^⑤

そして、④には、「現代社会における敬意表現」の趣旨をふまえ、その趣旨が確実に生かせるような「具体的な指針」作成を目指すべき

と明記されるに至っている。平成一七年九月七日に開催された文化審議会国語分科会第一回敬語小委員会の議事録によると、敬語の指針公表に向けて、次のような予定が示されている。

○平成一八年一月くらいに一年目の経過報告を総会に出す。

○平成一八年九月ごろ案を作ってパブリックコメントを出す。

○平成一九年二月くらいに最終的な答申

を目指す。

また、平成一七年十一月一四日に開催された第四回敬語小委員会の「資料2「具体的な敬語の指針」のイメージ(書かれるべき内容)」では、次のような項目が検討されている。

1 総論

2 敬語の仕組み

3 敬語の具体的な使い方

文化審議会国語分科会によって作成される「具体的な指針」では、本稿3.1で必要性を述べた「抛り所」としての要素や、3.2で触れた諸問題の解決の糸口となる要素が示されることが期待できる。

まとめ

本稿で報告したことをまとめると以下のようになる。

I. 履修生の特徴として、次のような敬語意識が見られた。

〈自己の敬語使用に対する強い規範意識〉

〈伝統的な敬語の使用が正しい敬語であるとする判別意識〉

〈親子関係における柔軟な敬語の運用意識と、立場にかかわらずに相手に配慮する敬語の運用意識〉

II. 履修生が、敬語に困ると感じているのは、〈アルバイト〉の場面で、〈店の客〉を相手に話したときである。

III. 経験不足によって敬語が身につけていないことに対して、「敬語は、相手への配慮を表す言葉の一つである」ということを、実践的に指導する必要がある。ただし、指導の際の「掘り所」がないのが現状である。

IV. 人間関係の多様化等に起因する敬語運用の迷いは、伝統的な敬語の説明方法だけでは解決できない。

V. 右のIVについては、一般社会でも懸念されている。また今後の国語施策も、「敬意表現」の具体化によってIII、IVの解決の糸口を示す可能性が高い。

注

(1) 具体的な問いの内容及び集計結果は、文化庁『平成一六年度 国語に関する世論調査』(平成一七年七月、国立印刷局)を参照のこと。結果の概要は、文化庁ホームページ(<http://www.bunka.go.jp/1kokugo>)でも公開されている。

(2) 日本語関連の雑誌記事目録のデータベースの対象雑誌は、以下のものである。データの一部は、『日本語ブックレット2002改訂版』として国立国語研究所ホームページ(<http://www.kokken.go.jp>)中で公開されている。

『総合雑誌』『潮』『現代』『諸君!』『新潮45』『正論』『世界』『中央公論』『文芸春秋』『Voice』『論座』
『文芸雑誌』『群像』『新潮』『すばる』『文学界』

『PR誌』『いずみ通信(和泉書院)』『いずみミニ通信(和泉書院)』『学燈(丸善)』『汲古(汲古書院)』『ぐんしょ(群書類従完成会)』『ちくま(筑摩書房)』『中国図書(内山書店)』『図書(岩波書店)』『波(新潮社)』『ひととき(JR東海)』『本(講談社)』『本の窓(小学館)』『本郷(吉川弘文館)』『未来(未来社)』『MYB(みやび出版)』『UP(東大

出版会』

(3) 竹部歩美(二〇〇五)『総合雑誌記事の動向』、国立国語研究所『国語年鑑』二〇〇五年版(大日本図書)所収。

(4) 竹部歩美(二〇〇三・二〇〇四)『総合雑誌記事の動向』、国立国語研究所『国語年鑑』二〇〇三年版・二〇〇四年版(大日本図書)所収。

(5) 国語審議会・文化審議会国語分科会の報告・答申、議事録・配布資料の一部は、文化庁ホームページで公開されている。

謝辞

本稿4.1の、雑誌記事における敬語の取り扱われ方は、竹部歩美さん(国立国語研究所情報資料部門研究補佐員)から、情報と分析の提供を受けました。ここに記して感謝申し上げます。